

平成17年度秋季特別展

越前松平家 ゆかりの刀剣

●会場 企画展示室
●会期 平成17年10月1日(土)～11月7日(月)

江戸時代においては、刀は武家の儀礼や、贈答の際において最も重要な品であり、將軍家はじめ各地の大名は、天下の名刀を集めることに力を尽くしました。越前松平家にも、様々な名刀が伝来していたことが知られています。その中には古くは平安・鎌倉の昔から伝わったものも多くありました。

本展では松平家にゆかりのある名刀の数々（重要文化財を含む計44件）を、それらにまつわるエピソードとともに一堂に集めました。日本古来、そして独特の美の世界にふれ、またそれらが伝えられてきた歴史の長さに想いをはせてみてください。

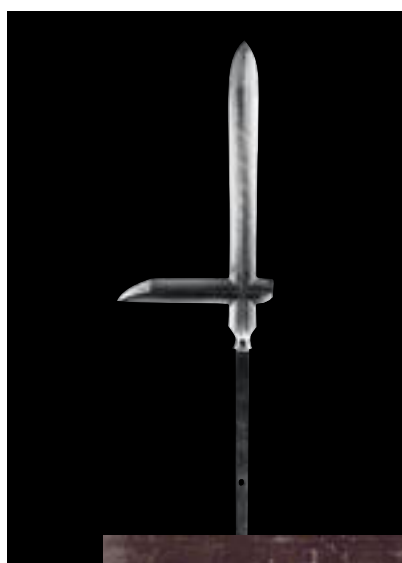
序 元和偃武

元和元（1615）年、豊臣秀吉の子・秀頼をいただく大坂城の豊臣方と、徳川家康との間におこった「大坂夏の陣」。その中で、越前の国主であった松平忠直も兵を率いて戦に加わり、敵方の大坂城に一番乗りするなど、大きな活躍をしています。こういった武将達のはげしい戦いは、さまざまな物語や書物、歌舞伎、絵画などで語り継がれています。

しかし、そんな武将たちが功名を争い、刀を交える大きな戦いはこれが最後となり、「元和偃武」、すなわちこの元和元年という年、武器をおさめて戦争が終わり、乱世とよばれた時代に終止符が打たれたのです。

「片鎌槍」は、はげしい戦の様子をよく物語っています。反面、このように戦のありようを伝える生々しい資料は越前松平家ゆかりとして伝わる刀剣類の中でもごく少数です。大半はほぼ健全なまま数百年前から伝えられている古名刀や、当代の名工の秀作として重宝された刀の数々です。

太平の世にあつては、戦場で功名を立てるためではなく、自らの好みに合わせて立派な刀、豪華な拵を手挟むこと、またそのために抱えの工人を膝元に置くことが諸国の大名の間で競われたことでしょうし、政治・社交の場での重要な道具として、刀はその価値を発揮していたのです。



槍 銘 広正

（室町時代中期 越葵文庫
松平宗紀氏蔵 当館保管）

大坂夏の陣の際、2代藩主忠直の弟の忠昌（当時17歳・上総姉ヶ崎城主）は大坂城の桜門に攻め入り敵方の剣術者、念立左太夫と直接戦い、槍の片方の鎌を打ち折られるという苦戦に陥りながら、これを討ち取ったという。のちの三代藩主自らの勇戦を物語る片鎌槍として、以後越前藩主の供立行列の際は必ずかざし歩くことが通例となった。



松平忠昌像(部分)
（運正寺蔵）

巻 愛刀の数々

桃山時代以来、武士、特に大名や大身の家臣たちは、古より伝わる名刀を自分が腰に差すのにあわせて拵を切り詰めたり（磨上という）、当代の名工に作刀させ、自分の名前を刻んだり、また刀にあわせて趣向を凝らした拵を幾種類も作らせたりと、さまざまな工夫をこらした愛用の刀を手挟んでいたようです。

越前においても、初代秀康をはじめとして代々の藩主、また家老の本多家など重臣の愛蔵になる刀・拵は一級の工芸品として今に伝えられています。



刀 無銘（号 朱鞘元重）・朱塗打刀拵

（南北朝時代 重要文化財 東京国立博物館蔵）

福井藩祖・結城秀康の愛刀中の愛刀で、越前松平家の重宝を記した『御重器見聞秘録』では「浄光院様（秀康）御平常御帶刀之也、身之姿大切先ニ而乱刃見事成る事言語ニ述かたし」と記されている。

結城秀康像(部分)
（運正寺蔵）

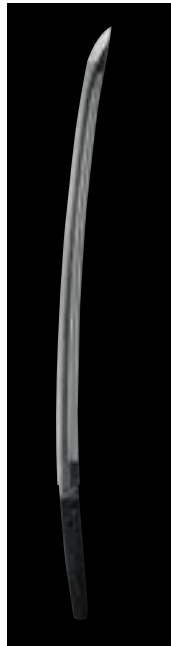
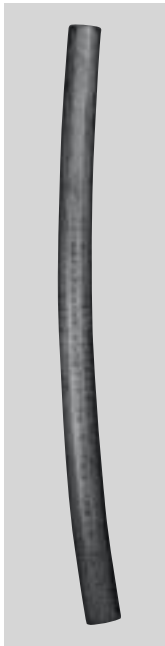




松平春嶽



横井小楠



貳 贈答の刀

刀は武家の象徴として、将軍・大名らが互いに交わす贈答のうち最も公式の品とされ、大名道具のうちでも公的な性格を持つ「表道具」の筆頭に位置付けられていました。特に初代秀康・二代忠直の頃には、名物石田正宗（重要文化財）・名物稲葉郷（国宝）・名物童子切安綱（国宝）・名物二筋樋貞宗（重要文化財）など、天下の名だたる名刀とのめぐり合わせがありました。これら「名物」の刀は、忠直が乱行などを理由に配流された後、越前家をはなれることになりますが、以降も越前松平家はいわゆる御制外の家柄として、特に高い家格を誇っていました。藩主就任や元服・婚礼などの折々には、将軍家などから贈られるさまざまな品の中に、名刀といえるものも数多くあったようです。

また藩主より家臣に対しても、折にふれて刀の下賜があったようですし、かわった由緒としては、幕末の土佐藩主・山内容堂が盟友である松平春嶽に、自ら鍛えた短刀を贈ったものなどが伝わっています。

刀 無銘（初代康継）・白鞘（横井小楠鞘書）

（江戸時代初期 個人蔵 当館保管）

文久元（1861）年4月、江戸霊岸島邸に幽閉中の松平春嶽に進講した横井小楠が江戸を去るにあたって春嶽より拝領した刀である。白鞘に小楠の自筆で由緒が記されている。即ち本刀は永見右衛門→秀康→忠昌と伝わり、以後松平家が代々相伝した後春嶽より小楠に贈られた。代々相伝の刀を小楠に与えたことは、小楠への春嶽の期待が実に大きかったことを物語っている。

参 家の安泰を願って ～奉納の刀～

越前松平家や本多家により保護され栄えた社寺は現在も各地に存在し、尊崇のしるしとして奉納された数々の品を伝えています。刀も数多く奉納されており、特に古風をのこす太刀拵のものが多くあります。これらは神仏への奉納のための宝物として、本来の武器としての刀の意味合いからはもっとも遠くはなれた、象徴的な品といえることができます。



太刀 銘（菊紋）山城守藤原国清・蠟色塗糸巻太刀拵

（江戸時代初期 白山神社蔵）

万治3（1660）年6月に4代藩主光通が平泉寺（現勝山市）

白山神社へ奉納した太刀である。当時福井藩のお抱え刀工には康継

や国清などがおり神社、仏閣などへ奉納する刀剣の作刀にも当たった。

肆 「お抱え」の工人たち ～刀工康継・国清～

諸国の大名は、その城下に刀工を住まわせ、自国の産業・技術の振興をはかるとともに、刀工たちは大名の庇護のもと、各々の作風をのばしていました。特に江戸初期においては名工とよばれる刀工を多く輩出しましたが、越前においても、この時代を代表する、康継・国清といった全国的に著名な刀工が松平家庇護の下、活躍しています。

五鉄之鍛書（江戸時代 個人蔵 当館保管）

越前下坂家に伝来した口伝書で、刀剣の素材となる鉄の独特な鍛え方を記したものである。

2代下坂康継（康悦）は将軍家と越前松平家双方に仕えた。しかし正保3（1646）年康悦没後、その跡目をめぐり康悦の嫡子右馬助と実弟四郎右衛門との間に相続問題を生じってしまった。そこで旗本阿部四郎五郎の周旋によって下坂家は越前と江戸の二家に分立することになった。このうち越前下坂家は四郎右衛門が康悦の扶持をそのまま継承し名を市左衛門と改めて幕末まで9代続く同家の祖となった。



伍 花開く武家文化～甲冑・刀装具・鞍の工人たち～



初代藩主秀康が北庄に城下町の建設を進めた時期、そこにはさまざまな技術をもった人々が招かれ、あるいは訪れ、福井の文化の基礎を担いました。前章で紹介した刀工たちもその中に含まれますが、他にも武家に必須の甲冑や馬具・刀装具製作などの工芸の分野で今に名を残す工人（集団）が存在しました。彼らの高度な技術、繊細な感性は現代の工芸にも通じるものがあります。

なん ばん じん まき え くら
南蛮人蒔絵鞍（復元品） （原資料は桃山時代 当館蔵 原資料は神戸市立博物館蔵）

慶長9（1604）年に北庄で製作された南蛮人蒔絵鞍（原資料は神戸市立博物館所蔵）の復元品。居木の裏側の漆塗膜下に記された墨書銘「慶長九／七月／吉日／於越州北庄／井関／造之／（花押）」により、制作者・制作場所が判明し、江戸時代初期の北庄の文化と繁栄を示す資料として貴重である。詳細な調査結果をもとに、可能な限り当初と同じ材料・寸法・工程・技法を用い、数名の職人の手によって復元された。その結果、華やかな金銀の蒔絵で南蛮人の姿を施した鞍が蘇った。

用語解説

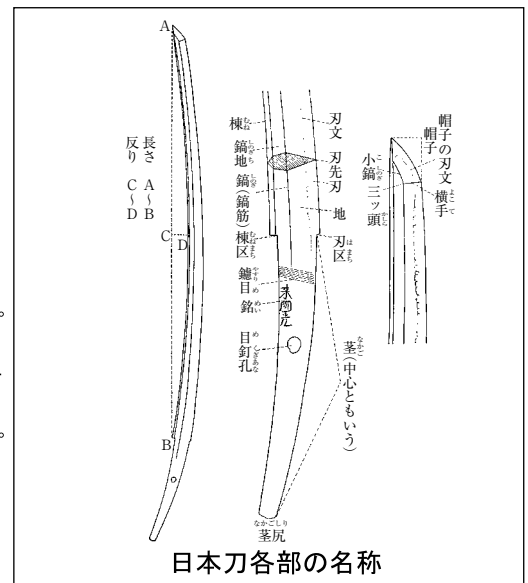
刀は武器として生まれましたが、同時にその美しさが人を魅了する、すぐれた美術品でもあります。

そんな美術品としての刀を鑑賞する際には、いろいろなポイントがあり、またそれを説明するのに耳慣れない専門的な用語もよく使われています。ちょっとむずかしいなと思うかもしれませんが、ここではそんな刀のみどころ、用語について簡単にご紹介しましょう。

日本刀の分類

日本刀には、形や長さによって太刀、刀、脇指、短刀といった種類があります。また、広い意味では、槍やなぎなた、剣なども、同様に日本固有の製法でつくられたものとして、その範疇に入ります。

- 【太刀】みなさんが美術館・博物館でご覧になるとき、刃を下にして飾ってあるのが太刀で、平安時代末期から室町時代の初めころまで、腰につるして用いたものです。反りがきつく、刃の部分の長さはふつう65～75cmくらいあります。
- 【刀】太刀にかわって室町時代中頃から用いられ、長さは太刀よりもやや短いものが多いです。太刀とは逆に、刃を上にして腰に指します。刀掛けに置く時も刃を上にして置きます。もとは太刀として作られたものも、茎の部分をやすりで削って短くする（磨上という）ことにより、刀として用いられました。
- 【脇指】刃の部分の長さが1尺（30.3cm）以上2尺以下のもので、刀と同じく腰に指します。桃山～江戸時代には「大小」といって、刀と一緒に用いられました。
- 【短刀】長さが一尺未満のもので、「腰刀」とも呼ばれます。



日本刀各部の名称

造込み

造込みとは、刀の構造を立体的に言い表したものです。平造り、鑄造り、切刃造り、両刃造りなど、いろいろな種類があります。

鍛え

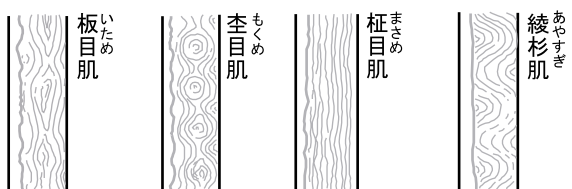
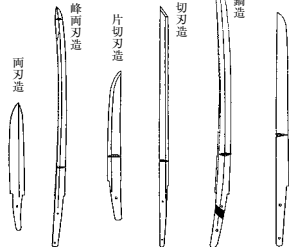
日本刀は「折れず、曲がらず」という条件を満たすために、炭素量の少ない心鉄（しんがね＝軟らかい鉄）を炭素量の多い皮鉄（かわがね＝硬い鉄）で包んで鍛造します。皮鉄は良質の玉鋼を用い、8～15回ぐらい折り返して鍛錬されます。「鍛え」とは地がねのことで、鋼そのものの材質と、その鋼を折り返し鍛錬することによって現れて見える肌目の模様を総合したものを言います。鍛え目がはっきり出ているものを「肌立つ」と言い、鍛え目が細く密着しているものを「肌がつむ」と言います。

鍛えの肌に樹木の肌模様と同じ紋様が見られるのはとても興味深いところです。それらには大別して「板目肌」「杢目肌」「柾目肌」「綾杉肌」などがあります。

沸と匂

焼入れを行うと、刃の部分と地の部分に、それぞれの硬さの差によって刃文が生じますが、刃文と地の境目などに「沸」や「匂」が現れます。沸は粒子の粗い部分で、肉眼でとらえることができますが、匂は顕微鏡で見てやっとわかるほど粒子が細かいものです。例えば、夜空に輝く星のようにきらきらと光って見えるものが沸であり、天の川のようにぼうっと霞んで見えるのが匂であると云えます。

造込みいろいろ



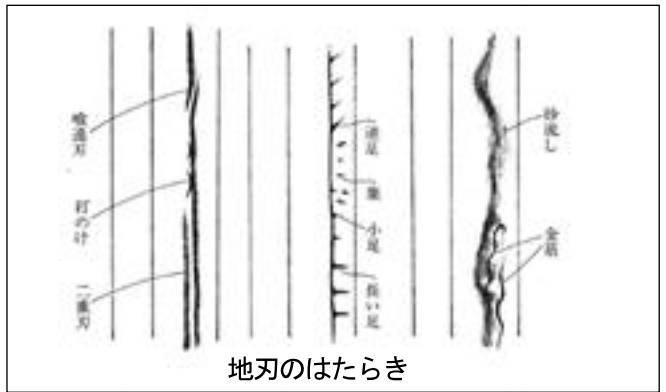
鍛えの肌いろいろ

地肌と刃文の働き

「働き」とは、地肌や刃中に動きや変化のあることを言います。焼き刃の働きはその形状によって、足・逆足・葉・砂流し・掃掛け・打のけ・金筋などと表現します。例えば、刃中の沸がつながって細い線となり、いっそう輝いてきらりと光って見えるものを金筋、やや太く長いものを稲妻と呼んでいます

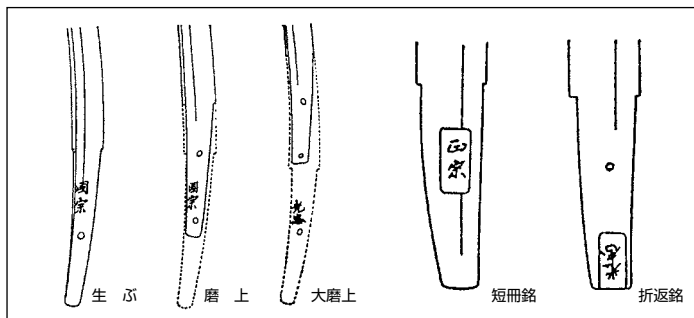
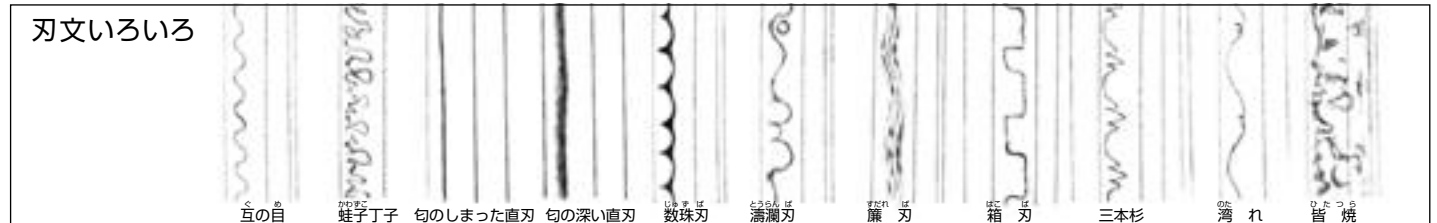
刃文

日本刀の美と言えば、姿や鍛え肌とともに「刃文」の美しさを挙げなければなりません。刃文とは、焼入れの技術によって生ずる模様のことです。焼刃土という粘土性のものを荒仕上げた刀身にへらを用いて薄く塗るのですが、塗り方で直刃になったり、乱刃になったりと、刃文の形が決まります。これを土取と言います。土取の土が乾いたところで炉に入れ、刀身の焼加減を見て水槽に入れます。これを焼入れと言い、最も技量を要する大切なものと言われています。



地刃のはたらき

刃文いろいろ



茎と銘

茎は刀剣の柄の内部に入る部分です。茎の形状・鑢目は時代や刀匠の系統によってそれぞれ特色をもっており、それらを知る際の手がかりになります。また現在見ることのできる刀の茎には、制作時のままの「生ぶ茎」と後に手を加えて磨り上げられた「磨上げ茎」があります。磨上げ茎にはまた、銘や当初の鑢目を残してあるものと、当初の茎をまったく残していない「大磨上げ茎」があります。

銘は一般には茎に作者の名前・居住地・受領官名などを鑿で切ったものです。太刀の場合は佩いた状態で外側を向く面（佩表）、打刀の場合は指した時に外側を向く面（指表）に切られるのが通例です。

またそういった通常の銘以外にもいくつかの種類銘があります。

【所持銘】刀の所有者が茎に自分の名前を切らせたもの。刀匠に注文する際に希望して切らせたものと古い刀を入手した際に新しく切らせたものがある。

【試銘】試し切りによって刀の切れ味を試した結果を茎に入れたもの。刑死体を使って試し切りを行った際には、死体の截断箇所によって「両車」「雁金」「袈裟」などの名称が付されます。また死体を重ねて両断した場合、「二ツ胴（落）」などと記されます。

【象嵌銘】試銘や所持銘など、またその刀の鑑定を行った人の名や花押などを金や銀で象嵌したもの。

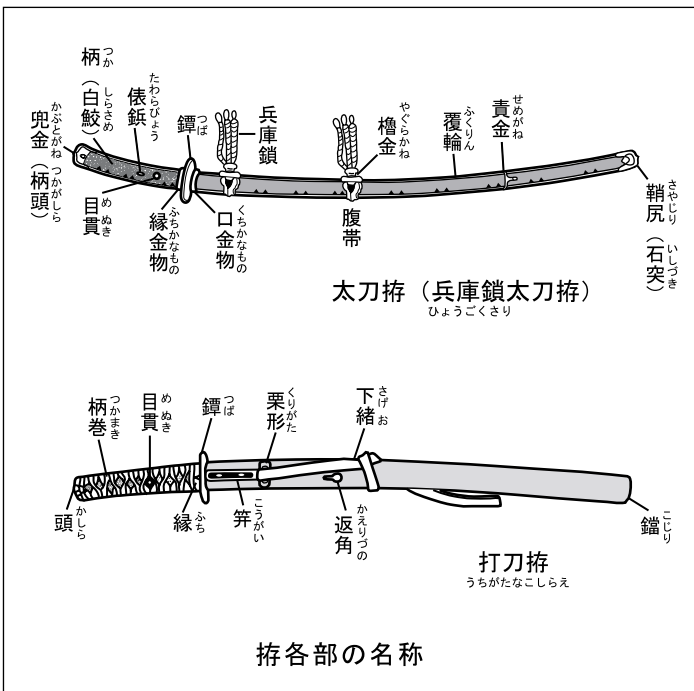
【朱銘】主に鑑定の結果や鑑定者を朱漆で銘文として記したものです。

【折返し銘】茎を磨上げて本来切られていた銘が失われる場合、銘を残すために銘の部分裏側へ折り曲げて仕立てたもの。

【短冊銘】銘の部分を短冊形に切り取って新しく仕立てた茎にはめ込んだもの。別の刀の銘をはめ込むこともできるので、銘を残すための処置としてはやや信頼性に欠けます。

刀装・刀装具

刀剣を携帯し、使用しやすくするための付属装置全体を刀装と言い、その部品を刀装具と言います。各分野の工匠の、高度な技術が結集しています。拵とは、刀装の形式のことです。太刀拵と打刀拵とがありますが、両者は帯佩着用（たひはいちやくよう）に違いがあり、刀装部位の同じ所でも、時代別、種別で便宜的に名称を区別しています。



拵各部の名称

《 関 連 行 事 》

記念講演会

日時：平成17年10月16日(日)
午後 2 時～ 3 時30分

場所：当館 2 階 講堂

講師：小林 暉昌氏

（（財）日本美術刀剣保存協会

刀剣博物館主任学芸員）

演題：「武将とその愛刀」

砥ぎ・刀装実演

（日本刀の砥ぎ／鞘やはばきの制作実演）

日時：平成17年10月9日(日)

11月3日(祝)

午前11時～12時

午前 2 時～ 3 時

場所：当館 2 階 講堂

砥ぎ実演：藤川 芳夫氏

刀装実演：勝山 捷容（一捷）氏

日刀保福井支部会員による解説

会期中、（財）日本美術刀剣保存協会福井支部の会員有志が展示室内に常駐します（午前10時～午後5時頃まで）。刀剣に関するご質問があればお気軽に声をおかけください。

『展示解説シート No.14』平成17年10月1日発行
福井市立郷土歴史博物館

福井市宝永3-12-1 電話 0776-21-0489

Fax 0776-21-1489

担当：松村 知也

制作／吉田錦文堂